

第二節 アヴェ・マリアの祈り

歴史的な背景

キリスト教が誕生してから今日に至るまで、さまざまな祈りが唱えられてきましたが、「主の祈り」のほか「アヴェ・マリアの祈り」ほど親しまれ、信仰者によって日常的に唱えられる祈りはないでしょう。わたしたちはもちろん日本語で唱えますが、世界中で、伝統的には、広くラテン語の祈りが知られてきました。「アヴェ・マリア」ということばは、そのラテン語の祈りの冒頭の句です。

現在の唱句は、六世紀から十六世紀における発展を経て成立しました。マリアの取り次ぎを願う祈りが加えられたのは、十五世紀以降とされています。「神の母聖マリア、わたしたち罪びとのために、今も、死を迎える時も、お祈りください」という唱句は、一五一四年のメルセス修道会の聖務日禱に初めて現われ、一五六八年教皇ピオ五世の聖務日禱書の改訂により最終的に決定されました。つまり、公認された祈りといってもよいわけです。

このような「アヴェ・マリアの祈り」の成立過程を見ると、教会の中でこの祈りは公認されたラテン語か、その忠実な翻訳で唱えるのがもつとも適当であると考えられます。翻訳ではなく、それぞれの創作による聖母マリアへの祈りが唱えられると、正当な伝統の中で発展し、カトリック教会において共通して唱えられてきた祈りから、多少なりとも内容の離れた祈りとなってしまうからです。

ここで、ラテン語と、日本の司教団によって認められた翻訳（口語訳）とを並べて載せておきましょう。

Ave, Maria, grátia plena,
Dóminus tecum:
アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、
主はあなたとともにおられます。

benedicta tu in mulieribus,
et benedictus fructus ventris tui, Iesus.
あなたは女のうちに祝福され、
ご胎内の御子イエスも祝福されています。
Sancta María, Mater Dei,
ora pro nobis peccatoribus,
神の母聖マリア、
わたしたち罪びとのために、
nunc et in hora mortis nostrae.
今も、死を迎える時も、お祈りください。

Amen.
アーメン。

大天使ガブリエルのマリア祝詞

初めの二行が、ルカ福音書一章二十八節に記された、マリアに会ったときのガブリエルのあいさつのことばです。ルカ福音記者はこれをギリシア語で記しました。大天使は、マリアを訪れて出会った瞬間、「カイレ、ケカリトーメネー」と語りかけたルカはいいいます。ギリシア語のカイレをラテン語では「アヴェ (Ave)」と訳しています。アヴェというのは、日常生活の中で、人と出会ったときに用いる呼びかけのことばです。特定の意味でとらえようとするのは正しくありません。「こんにちは」「こんばんは」といったあいさつに近いのです。ところが「カイレ」というギリシア語は、それとは少々異なります。「いかがですか」というような普通のあいさつの響きもありますが、「おめでとう」とか「喜びなさい」という意味をもそこに含むのです。ルカがギリシア語のこのことばを用いたということは、ガブリエルは、神からもたらされる偉大な祝福と恵みをマリアに見たのだということの意味します。このニュアンスを他言語に置き換えることは甚だ困難です。わたしたちがマリアに呼びかけるときには、「アヴェ、マリア」と唱えながら、もともとルカが記したギリシア語のマリアへの祝福に満ちたことばの意味を思い起こすようにしよう。それもただ「おめでとう」とか「喜びなさい」といった意味を思い浮かべるのではなく、神から与えられる神による喜びを考えることが大切です。イスラエル人たちのあいさつとして使われるヘブライ語

の「シャローム」も、つねに神によってもたらされる平和や喜びを意味しているのです。

次の「ケカリトーメネー」というギリシア語は、ラテン語では *gratia plena* と訳されています。このラテン語を日本語にすると「恵みに満ちた方」となります。しかしこの句も、ギリシア語にはもっと豊かな含みがあります。ケカリトーメネーの根幹になるのはカリスということですが、これはあふれるほどの寵愛を意味します。ですから、ただ恵みに満ちた方であるというだけではなく、神の寵愛があふれんばかりにマリアに注がれているということとを伝えているのです。マリアはどれほど神の愛に包まれていたのでしょうか。大天使のことばであるだけに、マリアの恵まれた幸せが実に大きく感じられます。さらにのちに、マリアがすべての信者の母とされ、教会とマリアが一体化されたとき（ヨハネ 19・26―27 参照）から、この寵愛は教会にも注がれることになったのです。

さて、これに続く次の「主はあなたとともにおられます」までが大天使ガブリエルのことばです。ルカ福音書に記されたギリシア語も、それを訳したラテン語も、文字どおり「主はあなたとともにおられます」と表現されています。しかし、このことばには説明が要ります。聖書の世界では、だれかが「主はあなたとともにおられます」と言えば、それは単に神がその人とともにいつもとどまっておられることを意味するだけでなく、神が与えられる使命があり、それを果たす力を与えるため、神がその人にとどまってくださるのだということをも含意するのです。

したがって、神がともにいるという表現は、一つの伝統的な使い方による場合、少し特別な意味が付与されます。旧約時代からしばしばこの種の表現が使われてきました。たとえば、モーセにイスラエルを解放する使命を与えたとき、神は、「わたしは必ずあなたとともにいる」（出エジプト 3・12）と言われました。新約時代でも、イエスは、昇天の際、弟子たちに宣教を命じられたとき、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」（マタイ 28・20）と言われました。

こういった例から分かるように、神がともにいるということばは、その人物が神から何らかの使命を与えられるという事実から分かるように、神がともにいるという表現なのです。マリアには、ここで救い主の母となる使命が与えられようとしているのです。

聖霊に満たされてエリサベトがマリアに贈ったことば

三、四行目には、大天使ガブリエルの祝詞に代わって、聖母マリアの訪問を受けたエリサベトがマリアに会った瞬間に語ったことば（ルカ 1・42）が取り入れられています。

この句の前半は、ルカ福音書の記述に沿えば「あらゆる女性の中でもっとも祝福された方」となります。あらゆる女性の中でもっとも祝福に満ちた方とは何を意味するのでしょうか。それは、まず天地万物の創造と人間の歴史、そして歴史を超え永遠の世界へと及ぶ壮大なスケールの全体における、マリアの存在がもつ意味と関係することからであるといえるでしょう。創世記の初めに、神は蛇に次のように言われました。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」（3・15）。初めの「お前と女」の「女」は単数形で書かれており、新しいエバとしてのマリアを予告し、男性の単数形で記されている「女の子孫」とは、マリアから生まれるイエスを予告するものといわれています。ひとりの男性（イエス）のかかたとを砕くとは、十字架刑によってイエスに加えられる苦しみを指すのです。後に預言者イザヤが語る「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」（イザヤ 7・14）ということばも、歴史の中のひとつ女性マリアの救い主へのかかわりを示す箇所とされています。これほどマリアは女の中でも祝福された方なのです。前半の句と対句になる後半の「ご胎内の御子イエスも祝福されています」については、あえて説明を加える必要はないでしょう。

後半の取り次ぎを求める願いごと

長年信者として生きていけば、自分自身の母として聖母マリアの保護と守りのもとにわが身を置きたいという

心情が深まってきました。試練や苦悩に直面したとき、思わず聖母に助けを求めたい気持ちにはならないでしょうか。いつも母として寄り添っていてくださる方によって、わたしたちは心安らかでいられるのです。

そして、わたしたちだれもがもつとも不安を感じるのには、その生涯を終えるときについてではないでしょうか。死を迎える時には、身体的にも、これまで経験したことのないほどの苦しみを体験しなければならぬかもしれません。苦しみのあまり、祈るゆとりさえ持てないかもしれません。だから、そのようなときに備えて、マリアに保護を願い、取り次ぎをしてくださるよう願うのです。わたしたちは、罪深い存在です。ですから聖母に、罪びとである自分のためいつも祈ってくださいるよう願う必要を感じるので、とくに死を迎えるときに自分を守ってくださいるようマリアに願うことは、本当に自分を知る者にとっては欠かせないことなのです。

第三節 栄唱

栄光は父と子と聖霊に。初めのように今もいつも世々に。アーメン

唯一の神性を持つ三者

無限性をもって、唯一の存在として生きておられる神に、互いに他と区別された「自己」を持つ三者がいらつしやることは、人間の知性では理解し尽くせない神祕です。父は父として、子や聖霊とは別の自己意識をもった独立したパーソンナリティーであり、子も他の二者とは別個の自己意識を持っておられ、聖霊もそうであるということが、わたしたちは信仰によって知っています。それぞれ独立したパーソンナリティーであるので、互いに互いの名をもつて呼び合うこともでき、互いに相手を愛することもできるのです。

三者への祈り

わたしたち人間同士の場合はどうでしょう。もし、知っている人たちの中でとても尊敬する人や、親身になって世話をしてくださる人や、愛する人に対しては、相手と向かい合っているだけで心が満たされたり、深い喜びを感じたり、感謝の気持ちがいってきます。和やかな雰囲気にも包まれます。

信仰の恵みをいただいて、この雄大な自然や大宇宙を造られたかたがどうかたであるか、また、わたしたち一人ひとりと神との関係がどのようなものであるかを深く知れば知るほど、自分自身の卑小さと神の偉大さを知ることになり、神への畏敬の念や、神への愛がわき上ってきます。このとき、人は無条件に神を敬い、賛美したい心情にとらわれることになるのです。

心から自然に湧き上がる願い事

神は神性だけを備えて存在していらつしやるかたではなく、それぞれ他とは別個の自己意識を持って、唯一の神性において三者で生きておられるかたなので、父と子と聖霊のそれぞれのみ名に呼びかけ、この三者がともに無限の栄光の中にもいつでも、またいつまでもとどまり続けられることを願うのです。

この栄唱といわれる祈りがいつ頃成立したのかは、正確にはわかりません。ヒッポリトは、現在、第二奉獻文として知られるミサ典文のもととなるすべての典文の中の最古のものを残した人ですが、彼はすでに栄唱を唱えることを知っていました（三世紀初め）。そこから見ても、広く教会の中で栄唱が唱えられるようになったのもかなり古くからであったと思われる。

しかし、栄唱に関してもっとも大切なことは、歴史の中でこの祈りがいつの間にか、主の祈りやアヴェ・マリアの祈りと並んで、人々から愛され、親しまれてきたことです。三位の神への愛慕が、自然に人々の心の中に、栄唱をわき上らせているのです。